

舊約聖書續篇

(アボクリファ)

本舊約聖書續篇（アポクリファ）は、現在聖公會に於て使用する英譯を參考として、原語より數名の聖職に依つて全譯せられたるものなり。わが聖公會が、この邦譯を公刊するに至りしことを喜び、之を一般に推獎するものなり。

日本聖公會監督會

### 本書の名稱について

本書は、舊約正經より洩れし、同性質の、主要なる諸書を蒐集したる『アポクリファ』の譯本なれば、これに舊約聖書『續篇』の名稱を附したり。

元來此等の諸書は、原始キリスト教徒の使用せしギリシヤ語舊約聖書の一部を構成し、建徳、修養のために、廣く用ひられたるものなり。

(本書卷頭の『解題』を参照せられたし)

## 序

昭和六年、日本聖公會諸監督より、アボクリファの邦語翻譯を依頼せられたる本委員等は、普通『ローマ版』として知らるる原本を用ひ、數書を分擔して、各自翻譯に従事し、うち一委員、編輯者として、特に原稿の整理に當り、ここに漸くその完成を見るに至れり。

本書は、英語改正譯、エズラ(エスドラス)第二書七章三十五節と三十六節との中間に挿入せられし、紀元一八七五年にペンズリー教授の發見せしラテン語原本斷片七十節(英語改正譯七章「三六節」より「一〇五節」まで)を除き、アボクリファ全部を、原語より邦譯せるものなり。

文體は、現行舊約聖書及び新約聖書に準據し、なるべくこれに近からんことを期したり。固有名詞は、大體に於て在來の讀方に従ひしが、中には發音の調子により、少しく變更せしものあり。又ギリシヤ名をヘブル名とせしものもあり。ギリシヤ語母音の讀方は統一せず、自由にこれを用ひたり。ことに重母音は、使用箇所によりて讀方を變へしものあり。子音默音の「t」及び「th」は「テ」と讀ませし箇所も、「ト」と讀ませし箇所もあり。

段落の切方は、在來の章節に拘泥せず、英語改正譯を參考とし、編輯者に於て適當と思惟する所に從ひてなせり。

編輯者の使用せし主なる參考書は左の如し。

Dr. Swete, *The Old Testament in Greek.*

英語聖書欽定譯、及び改正譯、

世界聖典全集・舊約外典（杉浦貞二郎氏譯）

ラルボット博士編・トビヤ書註解（守屋興雄氏譯）

ラルボット博士編・マカハ前後書註解（守屋興雄氏譯）

Dr. Charles, *Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament, Vol. 1.*

S. P. C. K., *Translations of Early Documents, First and Second Series.*

S. P. C. K., *A New Commentary on Holy Scripture.*

*Speaker's Commentary.*

*Cambridge Bible.*

*Oxford Church Biblical Commentary.*

本譯書は、不備の點少からずと雖も、大能者の祝福と祐導とによりて、信徒の教養、建徳のために、廣く使用せらるるに至らば、幸これに過ぎず。

終に臨み、本書の編輯に當り、特に校正の勞を取り、種々よき暗示を與へられし一長老、及び文體、文法等に關し、懇切なる指導を吝まざりし一教授の好意を深く感謝す。

猶、豫期せざりし事故發生のため、本書の發行、豫定より著しく遅延せしことを謝す。

救主降世一九三四年二月二日 被獻日

アポクリファ翻譯委員



## 舊約聖書續篇解題

本書は『舊約聖書續篇』といふ名稱を用ひたが、『アポクリファ』の諸書を翻譯せるものである。元來此等の諸書は、ギリシヤ語舊約聖書の正しき一部分として傳へられたものである。

『アポクリファ』といふギリシヤ語は、『隠れたるもの』といふ意味であるが、本來は『奥義の書』の意味に用ひられた普通の用語であつて、紀元第四世紀までは、現在のアポクリファの諸書に應用されなかつた。師父オリゲネスは『アポクリファ』といふ語を、公の使用を許されない書物の意味に用ひ、これを所謂『アポクリファ』(經外聖書)でなく、普通『シウデビグラファ』(擬似聖書)として知られて居る諸書に充て用ひた。其等の諸書は舊約正經の定められた後、ユダヤのラビたちによつて公の使用を禁止されたが、初代キリスト教會に於ては、建徳、教養のために、自由に使用された。

『アポクリファ』といふ語の使用に、根本的な變化の生じたのは、師父ヒエロニムス(紀元三四〇—四二〇)の時であつて、これまで歐洲西部に知られなかつた多くの書物が東部教會から出て來

たので、ヒエロニムスはヘブル語舊約正經外の書物に劃然たる區別をつけ、『アポクリファ』といふ語を、初めて現在の所謂『アポクリファ』に用ひた。そして此の名稱は、初はあまり廣く行き渡らなかつたが、漸次に、一般に用ひられるやうになり、今日に至つたのである。

ローマ教會に於ては、紀元一五四六年トレント會議の時、アポクリファ(但し、エズラ第一書、第二書、及びマナセの祈禱を除く)を、舊約正經の一部として公認した。英國聖公會に於ては、アポクリファを舊約正經には屬しないが、『生活の模範、及び行爲についての教訓』のために、教會にて讀まるべき聖書として公に承け入れた。

『アポクリファ』は我々に、心靈的で且つ實際的な教訓を與へる信仰生活の指導書であるばかりでなく、新約時代直前より新約時代へかけての、ユダヤ人の宗教的發達を示す大切な文獻である。本書には、アポクリファの諸書を英語聖書の順序に従つて配列したが、年代的に見れば、大體に於て次の如く三つの時期に當てはめることが出來よう。

一 紀元前二〇〇—一〇〇年   ベン・シラの智慧、トビト書、ユデト書、ダニエル書への追加(即ち三童兒の歌、スザンナ物語、ベルと龍)

二 紀元前一〇〇—一年   マカビー第一書、マカビー第二書、ソロモンの智慧、エズラ

第一書、エステル書殘篇、エレミヤの書翰、マナセの祈禱

三 紀元後一—一〇〇年 バルク書、エズラ第二書

便宜のため、本書に配列した順序に従ひ、これらの諸書に簡単な解説を加へよう。

**エズラ第一書** 普通『エズドラス書』(Esdra)と讀まれて居るが、ギリシヤ語で「s」と「d」が重り合へば「z」と殆ど同音となり、且舊約正經にては、「エズラ」なれば、本書にても、これを『エズラ』と讀ましむることとした。これは歴代志略下、エズラ書、及びネヘミヤ記に由る資料を比較的自由に編纂した、ヨシア王の時代よりエズラ、ネヘミヤの時代に至るまでのイスラヘル人の歴史である。三章より五章に至る三人の衛士のうるはしい物語は本書特有のものである。

**エズラ第二書** アポクリファの原本はすべてギリシヤ語であるが、この書だけはそのギリシヤ語原本が失はれ、ラテン語譯本が使用されて居る。此は多分紀元七〇年のエルサレム没落後、一人のユダヤ人に由つて記されたのが、その後キリスト教の一記者に由つて改訂され、その主要部分が紀元一二〇年頃世に出たものであらう。これは歴史ではなく默示文學に屬すべきものである。

**トビト書** 『トビア書』ともいはる。これは俘囚時代を背景とした、田園詩的な、美しい物語であつて、その中に少からざる教訓が含まつて居る。幾つかの昔話を資料として編纂したものであらう。

**ユデト書** 歴史小説ともいふべき本書は、俘囚直後の時代を背景として、ユダヤの年若き一人の寡婦がその美貌を利用して、敵軍の大將を殺した愛國的物語である。

**エステル書殘篇** これは舊約正經のエステル書に、もつとはつきりした宗教的色彩を與へるために、書き加へられたもののやうに思はれる。

**ソロモンの智慧** 本書はアポクリファ中で最も美しい書物の一つである。『ソロモン』の名を冠したのは、舊約正經の『傳道書』と同じく、文學的のあやに過ぎない。所謂智慧文學に屬するものであつて、ユダヤ人を異教生活の誘惑とギリシヤ哲學の牽引力から救はんがために記されたものである。これはヘブル文學中で最もギリシヤ的な書物であるが、その『智慧の讚美』は、いかなるギリシヤ文學にも劣らない立派なものである。

**ベン・シラの智慧** 『ソロモンの智慧』と共に、アポクリファ中で、最も大切な書物の一つである。ギリシヤ語原本の名稱は『シラクの子イエスの智慧』であるが、普通これを略して『シラクの智慧』と呼んで居る。本書にはヘブル名稱をとつて『ベン・シラの智慧』とした。『教會書』と



いふ名稱を用ひられて居るが、これは、キリスト教會に於て、永い間、信徒、及び求道者教養のために用ひられたからであらう。これも智慧文學に屬するものであつて、多くの實際問題を取り扱つて居るが、その主眼とする所は智慧の高調にある。ヘブル語で書かれたのを、ベン・シラの孫がエジプトでギリシヤ語に翻譯したといはれて居る。

**バルク書** あまり連絡のはつきりしない様々な資料を一つに纏め、これをエレミヤの弟子バルクの作としたもので、舊約の豫言を模した書物である。

**エレミヤの書翰** 普通バルク書の第六章として取扱はれて居るが、本書ではこれを區別した。エレミヤの名を借りて、偶像禮拜を責めた書である。

**三童兒の歌** 次の『スザンナ物語』及び『ベルと龍』と共に、ダニエル書への追加である。終りの讃歌は『萬物の頌』として、日本聖公會祈禱書の早禱の中に、『讚美の頌』の代用頌として挿入されて居る。

**スザンナ物語** ダニエルが、善良なる美しい婦人スザンナに對する二人の長老たちの悪しき計畫を發見せし物語。

**ベルと龍** ダニエル書十二章に続く。偶像にささげたるものを私かに食ふ祭司が、ダニエルのために見破られる。又ダニエルは龍の像を破壊する。これは偶像禮拜の不合理なることを示さんがために記された書である。

**マナセの新禱** ユダの王マセナの懺悔の祈禱（歴代史略下三三ノ一八参照）。

**マカビー第一書** 此の書は稀に見る、信據すべき歴史的文献である。記者は正統派ユダヤ教の歸依者なる熱心なる愛國者で、ヘブル語で記したものを、後にギリシヤ語に翻譯したものであらう。これはアンテオコス・エピパネスの即位した時（紀元前一七五年）よりシモン・マカビオの死（紀元前一三五年）に至るまでの歴史であつて、いかにユダヤ人等がマカビー家の指導の下に、宗教的自由並びに政治的獨立のために戦つたかを記す。

**マカビー第二書** クレネのヤソン（二ノ二三）なる者に由つて記された五卷の大冊物の要略であるとして居るが、大體第一書と同じ時代を背景とし、空想的な物語を織り込んだ文學的な歴史物語である。第一書の歴史の續篇ではない。



# 目次

卷頭の言  
序

舊約聖書續篇解題

エズラ第一書	一
エズラ第二書	三元
トビト書	一〇五
ユデト書	一二九
エステル書殘篇	一六五
ソロモンの智慧	一七五
ベン・シラの智慧	二二九
バブルク書	二〇三
エレミヤの書翰	三二一
三童兒の歌	三三七
スザンナ物語	三三三
ベールと龍	三三九
マナセの祈禱	三四五
マカビー第一書	三四七
マカビー第二書	三四七

昭和九年二月五日印刷  
昭和九年二月十五日發行  
昭和九年十月五日再版

昭和九年十二月三十一日四版  
昭和十五年十一月三十日五版  
昭和十七年十一月十六日六版

●定價金二圓五十錢

送料 二十錢

舊約聖書續篇翻譯委員

エス・エチ・ニコルス

譯者代表  
東京市麻布區材木町二四  
島 田 博 斌

發行者  
東京市小石川區柳町一九  
刈 米 窪

印刷者  
東京市小石川區柳町一九  
印刷所 小石川印刷株式會社

不許  
複製

發行所

東京市麻布區材木町二四  
振替口座東京四一七四〇

聖公會出版社